長崎日本大学学園の特色作りに大きく貢献

ヴァイオリン科　近澤侑司先生クラス

国際スズキ・メソード音楽院を卒業して長崎に派遣され9年目になる近澤侑司先生。私学の中高一貫指導の中に組み込まれたヴァイオリン教育も正規の授業として担当するほか、部活動でもヴァイオリンを指導、さらには地域の子どもたちへの通常のレッスンも行なっている。

教室めぐり 42 長崎

・諫早市貝津町 1555 長崎日本大学学園内
・大村市東三城町 48-1
　中央総合ビル 1F プリルーム内
　tel.080-5606-3609

ヴァイオリンの各サイズを並べ、体験会を実施している

近澤侑司先生が、ヴァイオリンを始めたのは5歳の時。もともとヴァイオリンの好きだった母親が友人のつながりで山田玲子先生（元関東地区ヴァイオリン科指導者・註）のもとを訪ねた。「人前で弾くことや練習は嫌いでしたが、レッスンは好きでした」。小学1年の時、山田先生が一家で海外に引っ越されたため、山中美知子先生（関東地区ヴァイオリン科指導者）にバトンタッチ。その後、父親の転勤で近澤先生一家は名古屋へ。小学4年からは大野佳子先生（東海地区ヴァイオリン科指導者）の教室に通った。

小学6年の時、ソウルでの第11回スズキ・メソード世界大会に単身で参加。帰路の空港で、大野先生に「何か曲をカセットに入れていただけませんか?」と突然頼んだことは、今も鮮明に覚えている。当時、寝る前に指導曲集のCDをセットし、聴きながら眠りにつくのが習慣だった。「世界大会で〝外の曲〟に触発され」、大野先生が両面カセットに入れてくださったチャイコフスキーやメンデルスゾーンの協奏曲、サン＝サーンスの「序奏とロンド・カプリチオーソ」などを通して、この時期、世界が一気に広がったという。

高校時代には、所属した吹奏楽部に教えに来る音楽大学を卒業したトレーナーが、音楽家として懸命に生活している姿を見て、音楽家への道を初めて意識するようになった。その気持ちを加速させたのは、1999年の松本での第13回スズキ・メソード世界大会で豊田耕児先生と出会えたこと。国際スズキ・メソード音楽院に進む気持ちを固めた。「スズキの先生になりたいより、翌年、ベルリンから日本に戻られる豊田先生に習いたい気持ちが強かった」。大野先生からは「大学を卒業してからではどうか。スズキの先生になる覚悟はあるのか」と何度も確認をいただいたが、心変わりすることはなかった。

2000年に音楽院に入学すると、豊田先生の厳しい指導が続いた。「君ね、そんなに大きな手をしているのだから、音程に関して言い訳できませんよ」。ヴァイオリン科研究会や浜松での全国指導者研究会で豊田先生から舞台に出され、泣く泣く演奏したことも数知れず。

註：2002年に娘の山田晃子さんがロン＝ティボー国際コンクールのヴァイオリン部門で優勝

（写真上）中学2年生への音楽の授業風景。正規の授業で中学生にスズキの曲目を柱にしたヴァイオリン教育が行なわれているのは、全国でも珍しい。学園の入学説明会では、楽器体験会を実施。開放弦を弾かせ、葉加瀬太郎の「エトピリカ」でアンサンブルの楽しさを伝えることも

（写真下）週3回の部活動。スズキの曲をピックアップすることもある

2014年3月の教室発表会。福岡からチェロ科の宮下壮介先生がお手伝いにいらした。少しずつでも長崎のこの地域にスズキが根づくことを願っている

その頃、長崎県諫早市で中高一貫教育を実践していた長崎日本大学学園が、地域文化創成と学園の情操教育強化の側面から、ヴァイオリン教育を積極的に取り入れようと、本会と提携。実験教室は「スズキ・メソードによる日大バイオリンアカデミー」と名づけられた。先行して二人の先生が担当し、05年9月、音楽院を卒業した近澤先生が初めて専任として派遣された。

以来、9年。近澤先生は音楽科の非常勤講師として、週2回、中学生にヴァイオリン演奏の指導を含む音楽の授業を行ない、週3回、放課後に中高合わせた部活動、さらに地域の親子相手にスズキの教室を展開する。合間に掃除の指導など学校生活に伴う諸事もフル回転でこなす。「日大のヴァイオリンを確立しておきたいのです。そのためにも〝あいつがいないと困る〟をセールスポイントにしたい」と奔走。32歳、はち切れんばかりのエネルギーを感じさせた。

「レッスンばかりだと学校生活が見えません。ここではフルタイムで子どもたちの様子がわかる。スズキの大切さをアピールしやすい」と近澤先生。「スズキで育つと、こういう能力が育つ」と積極的に発信することも心がけている。古巣の東海グランドコンサートには生徒の二家族と参加した。「あそこで弾くと気持ちが変わる」その実感を植え付けられたと手応えを感じている。

小学校1年頃。お正月に名古屋の祖母を訪ねてヴァイオリンを披露。練習は好きではないが、レッスンは好きだった

音楽院での卒業演奏。当時の伴奏を担当した仲間たちとは、今でも指導者研究会などで旧交を温め合う

6年目になる9歳の生徒に、「共鳴の一点」を確かめさせる近澤先生。読譜の練習も欠かさない

「お母さんと話す時間が長いほど、生徒さんは育つ」が持論。5歳児の右手の小指が上がる癖の直し方を伝えていた

息子さんにもレッスン。「家でするよりも集中します」。奥様（江口祐子先生）を4年前になくし、男親一人で育てている